



## 第15回「見た目のアンチエイジング研究会」報告

日本抗加齢医学会の分科会である「見た目のアンチエイジング研究会」は、2021年10月31日に会長の白壁征夫先生(サフォッククリニック理事長)のもと、15回目の集会を開催した。コロナ禍のため、昨年に引き続きオンラインでの開催となった。同研究会はその15年間の歴史と変遷を振り返り、未来への可能性を探る内容であった。診療科を超え約200名が参加した。研究会当日の内容について報告する。

### ①加齢性慢性疾患の予防は 生物学的老化の遅延から

山田秀和先生の「見た目のアンチエイジングアップデート」は、本研究会の第1回から毎年行われてきたプログラムである。老化は疾患であり、治療可能であるとの考えが浸透しつつある現在、生物学的老化を遅らせることにより、多くの加齢性慢性疾患が防げるという「ゼロサイエンス仮説」が提唱されている。その他、愛撫を感じるために必要な遺伝子の研究が行われていることを紹介した。さらに、女性特有の疾患、症状をケアするフェムテックが爆発的に浸透してきていること、皮膚や髪の画像をAIによって解析し、対象者が罹患している恐れのある疾患をリストアップするアプリケーションなどについても言及した。

### ②ダウンタイムの短さが重要 美容医療の立場から考える高齢化

山下理絵先生は、デバイスを用いた美容医療の歴史をたどった。以前はたるみ治療には手術、部分痩せ治療には脂肪吸引が行われてきたが、約30年でヒアルロン酸等の注入材による治療、機器による部分痩せ治療が進化し、現在では治療の9割が

外科的手術以外によるものである。低侵襲でダウンタイムが短いことが日本人の患者に受容されやすいためだと考えられる。

また、患者の高齢化が進み、70～80歳代でも美容医療を受ける患者が増えており、診察時には聴力に問題がないか、理解力は十分にあるかを確認する必要があると述べた。

さらに、コロナ禍での不活発な生活、食生活の乱れ、外出の自粛などによって肥満や筋力低下が生じ、多くの人がそれを自覚している現状についても言及し、ボディ・コントウアリングのニーズがより注目され始めていることについても触れた。

### ③低侵襲な若返り術の浸透と 再生医療の応用

市橋正光先生は、同研究会の歩みとプログラムや講演内容を振り返りつつ、わが国の見た目のアンチエイジングの進歩についてまとめた。15年間で変わらなかったものとしては食事、運動、心を重視するコンセプトとともに、抗酸化および抗糖化作用をもつ成分や加齢に伴って減少する成分を摂取する必要性を挙げた。

15年間で変化したものとして、

低侵襲な若返り療法、物理的皮膚刺激療法、再生医療の応用を挙げた。とくに、再生医療と美容に関しては、厚労省ホームページに記載された再生医療に関する法律や提供施設数などを示すとともに、皮膚の美容、再生医療の役割および幹細胞の美容医療適応にあたっての問題点にも言及した。

### ④受けやすくなったスレッドリフト 併用療法も進化

鈴木芳郎先生は、スレッドリフトについて誕生から現在の治療に至るまでの歴史を解説。使用されてきたスレッドの種類を含め、症例を提示しつつ、過去と現在の治療の違いを明解に比較した。

スレッドリフトの過去と現在の違いとして、かつては挙上をおもな目的として行われていたが、引き締めも可能となったことや、施術がきわめて簡単になったこと、顔面全体から部分的な効果を求める使用法に移行していること、さらにスレッドリフト単独治療だけでなく、ヒアルロン酸製材などの注入や高密度焦点式超音波 (high intensity focused ultrasound ; HIFU) による治療などとのコンビネーションが行われて